

教会の島・五島列島を旅して

鈴木 茂 (横浜つづきクラブ)



2009年10月の中旬、10人程のグループで五島列島の上五島を旅した。長崎港「大波止」から、ジェットホイール高速船に乗り1時間15分で上五島の奈良尾港に着く。五島列島は長崎市の西方沖約100km、東シナ海に浮かぶ大小140余りの島々からなる。行政的には上五島と下五島とに分けられているが、五島列島は全体として、教会の島であり、祈りの島である。島の浦々に点在する教会は、250年以上に及んだキリシタン弾圧の歴史をしのばせる信仰の証しとなっている。

現在、五島列島には教会が50、うち上五島には29の教会が活動している。ほとんどがカトリックで、上五島の人口約2万4千人のうち、実に25%、6,000人がカトリック教徒である。毎日曜日のミサには、多くの教会が信者であふれ、立ったままミサに参列する信者も少なくないと言う。



大曾教会

1550年、フランシスコ・ザビエルによって日本(平戸)に初めてキリスト教が伝えられてから16年後のことである。以後、五島藩によって布教が許されたこともあって、五島の各地

五島列島に最初にキリスト教が布教されたのは1566年、修道士ルイス・アルメイダと日本人最初の修道士ロレンソによる、と伝えられている。



大曾教会堂内

にキリシタンが誕生した。しかし、五島布教開始31年後の1597年、豊臣秀吉はキリシタン弾圧の嚆矢として、京都から連れて行った26人のキリシタンを長崎・西坂で処刑した。その26聖人の中に五島出身の修道士が含まれていた。この事実から、五島のキリシタンの数はかなりの規模に達していたことが推測される。その後、徳川幕府が1614年に禁教令を発し、島原の乱(1637年)後は特にキリシタン弾圧を厳格化したことから、五島のキリシタンは潜伏し、秘かに信仰を守り続けた。

島原の乱から150年後の1787年、五島藩は土地開拓に人手が必要との理由で、大村藩に開拓移民を要請した。これが契機で、結果的に3,000人程のキリシタンが仏教徒を装って大村藩外海地区から五島列島に移り住むことになった。この外海地区こそ、遠藤周作の名作「沈黙」の舞台となった処で、「遠藤周作文学館」があたかも遠く五島列島を望むかのごとく五島灘に向かって建てられている。

250年以上にわたって何代も潜伏を続けた五島の潜伏キリシタンは、1873年(明治6年)の禁教令撤廃によって晴れて信教の自由が公認され、多くがカトリック教会に戻った。しかしその過渡期には、1865年の浦上天主堂での「信徒発見」事件に端を発したキリシタンの意識覚醒の高まりの中で、信仰を表明したキリシタンが相次いで投獄、拷問、郷責め(地元住民による迫害)などの厳しい迫害を受けるという悲劇が

五島の各地で発生した。この迫害は明治になってからも、禁教令撤廃まで続いた。

禁教令撤廃以降、カトリック信仰を明確にしたキリシタンを「復活キリシタン」という（因みに、明治6年以降も潜伏時代と変わらない独自の信仰形態を続ける人びとを「かくれキリシタン」と呼び、「復活キリシタン」と区別する）。

五島の「復活キリシタン」が明治・大正期に、カトリック信仰の証しとして建てた教会が、現在の五島列島に点在する教会群である。建物自体はその後の改修、改築によって2代目・3代目となっているものも多いが、当初の面影を残している教会も少なくない。



冷水教会

私たちは上五島の“青方”に宿泊、翌日は朝から、潜伏キリシタンを先祖に持つ熱心なカトリック信

徒の森下さんの案内で、「大曾教会」、「冷水教会」、「青砂ヶ浦教会」、「頭が島教会」、「鯛の浦教会」、「中の浦教会」、「福見教会」の7教会をバス巡りした。何れの教会も、外観以上に建物内部の構造、内装、ステンドグラス等の醸し出す雰囲気明るく、「復活キリシタン」の永い潜伏から解放された信仰の喜びが表現されているように感じられた。



頭が島教会堂内

翌日私たちは長崎に戻り、大浦天主堂、浦上天主堂、日本二十六聖人記念碑、遠藤周作

文学館など、何れも五島の過酷なキリシタン史にゆかりの深い場所を訪問することができたことは幸せであった。

(横浜つづきクラブブリテン:2010年1月・2月号)